

災害対策マニュアル

(学生用)

令和6年6月

福岡看護大学

目次 ～災害対策マニュアル（学生用）～

はじめに	1
I.地震	2
1.地震直前（緊急地震速報）／地震発生.....	2
【大学構内にいる時】	2
【大学以外にいる時】	3
2.地震後（揺れがおさまったら）	4
■避難口の確保と負傷者や火元の確認！	4
■避難指示および避難行動	4
地震発生時の行動マニュアル	6
3.避難	7
【大学以外にいる時】	8
4.安否確認	8
II.火災	9
III.風水害	11
IV.日頃の準備	12
V.弾道ミサイル落下時の行動について	14

はじめに

災害は、なんの前ぶれもなく突然襲ってきます。近年においても、阪神・淡路大震災（1995年）、東日本大震災（2011年）、熊本地震（2016年）、九州北部豪雨（2017年）が発生しています。福岡看護大学がある福岡市でも、2005年3月に発生した福岡西方沖地震においては、大きな被害を受けました。日頃からの災害に対する心構えの希薄さや設備の整備や物資の備蓄が個人や地域、自治体においても不十分であったことが一つの要因とされ、その教訓を生かし、今日各種の防災計画が策定され、施設の耐震整備も進められているところです。

福岡学園においても「安全で快適な教育環境」の確保が重要であるという観点から、いつ発生するかわからない地震をはじめ、火災や風水害などの被害を未然に防止し、また万一発生したときでも被害を最小限にとどめる様々な取り組みを進めています。

このマニュアルは、学生の皆さんが、安全に安心して教育・課外活動さらには快適な日常生活を送れるよう、震災や火災、風水害などの災害に迅速かつ的確に対応するために、学生生活における注意事項や具体的行動を定めたものです。内容をよく読んで「いざ」という時に備えましょう。

I 地震

地震はいつどこで起こるかわからない。日常生活すべての場面において、地震が起こったときの自己の行動をイメージすることに努めること。また、避難路や避難場所は常に確認しておくこと。自宅においても、家具などの転倒防止措置や非常用飲料水、非常食や非常用持ち出し品を常備しておくなど、緊急時に備えておくこと。地震発生時には、まず自分の身の安全を確保するよう努める。どんなに大きな地震でも、大揺れは1分程度でおさまる。揺れがおさまるまで冷静に待機すること。また、常に周囲と声をかけあって集団で行動すること。

学生の心得

- 1) 個人行動やパニックは、被害を大きくすることがあるため、冷静に、落ち着いて、教職員の指示に従うこと。
- 2) 教職員が側にいない場合、余震の可能性もあるため、あわてずしばらく様子を見る。
- 3) 火災が起きていないか？火災の場合は自分の身が安全な範囲で周囲の協力を得ながら初期消火をおこなう。しかし、消火が困難と判断した場合は、火から離れる。
- 4) 負傷者がいる場合は、安全な範囲で周囲の協力を得ながら応急手当をおこない、事務へ連絡する。
- 5) 避難の際は、すみやかに教職員の指示に従い集団で行動をする。
- 6) 避難後に安否確認をおこなうので、クラスリーダーは、可能な範囲でメンバーの行動を確認する。

1. 地震直前（緊急地震速報） / 地震発生

- 緊急地震速報がでたら、身を守る準備を！
周りの人に知らせ、身をかがめ
頭部を保護するか、安全な場所へ移動
窓や倒れる可能性のある物から離れる

【地震時に身を守る3つの安全行動】



出典：効果的な防災訓練と防災啓発会議

【大学構内にいる時】

<教室等にいる時>

- 1) 個人行動やパニックは、被害を大きくすることがあるため、冷静に、落ち着いて、教職員の指示に従う。
- 2) 窓や棚、ガラス等割れたり中のものが飛び出しそうなものから離れる。
- 3) 机の下等にもぐるか、バッグ・衣類などで頭を覆うなどして、落下物から頭と手足を守る。
- 4) 余裕があれば、ドア付近にいる人は、ドアを開け、出口を確保する。
- 5) 演習等で、熱湯や薬品などを使用している時は、身の安全の確保を最優先し一旦離れる。
- 6) エントランスホール/学生ホールにいる場合は、安全な場所に集まってしゃがみ、落下物に注意する



<廊下、階段にいる時>

- 1) 壁が倒れてくる可能性があるため、壁には寄らず、できるだけ教室に避難して机の下にもぐる。
- 2) 教室がない場合は、LED灯などの下から離れ、衣服や持ち物などで頭を覆いかがみこむ。

3) 渡り廊下（玄関上）や階段を通行中の場合は、すみやかにそこから離れ、安全な場所に退避する。

＜エレベーターに乗っている時＞

- 1) 最寄の階のボタンを押して、停止した階で降りる。
- 2) 途中で停止した場合は、非常ボタンやインターホンで外部に救助を求める。



＜グラウンドにいる場合＞

広場やグラウンド等、落下物がない場所にいる場合は、その場で座り込み揺れがおさまるのを待つ。

【大学以外にいる時】

＜乗り物に乗っている時＞

- 1) 急停車に備え、つり革・手すりなどにすぐつかまる。
- 2) 停車しても、勝手に非常コックを使って車外へ出たり、窓から飛び出したりせず、乗務員の指示を待つ。
- 3) 特に地下鉄などは、線路横に高圧電流が流れており極めて危険（案内があるまで、線路に降りるのは危険です）。



＜地下にいるとき＞

- 1) あわてて出入り口に殺到せず、いったん壁や太い柱に身を寄せ、係員の指示に従う。
- 2) 停電になっても非常用照明灯がすぐつくので、落ち着いて行動する。
- 3) 出火がある場合は、近くの消火器ですばやく消火する。
- 4) 地下での火災は煙や有毒ガスが充満しやすく危険である。ハンカチなどで鼻と口を覆い、体をかがめて這うように壁伝いに煙の流れる方向へ避難する。

＜路上にいるとき＞

- 1) その場に立ち止まらず、衣服や持ち物などで頭を覆いながら近くの空地、公園や頑丈そうなビルの中へ避難し、落下物からの危険を回避する。
- 2) ブロック塀や自動販売機など設置物のそば、ビルの壁際などへは近づかない。
- 3) 垂れ下がった電線には近づかない
- 4) 崖や川べりは、地盤が緩み崩れやすくなっている場合があるので近づかない。地面の亀裂、陥没や電柱、塀等の転倒に注意する。



＜自宅等にいるとき＞

- 1) 基本的には、教室等にいるときと同様に、あわてて外へ飛び出さず、机の下等に身をかくし揺れがおさまるのを待つ。
- 2) 足元の散乱物や落下物に注意して避難などの対応を行う。

＜実習先の病院・施設にいる時＞

大学構内に準じ、冷静に行動する。入院患者さんが動揺するため大声を出さない。



2. 地震後（揺れがおさまったら）

■ 避難口の確保と負傷者や火元の確認！

冷静に、落ち着く。

自分のいる場所は安全か？

火災が起きていないか？

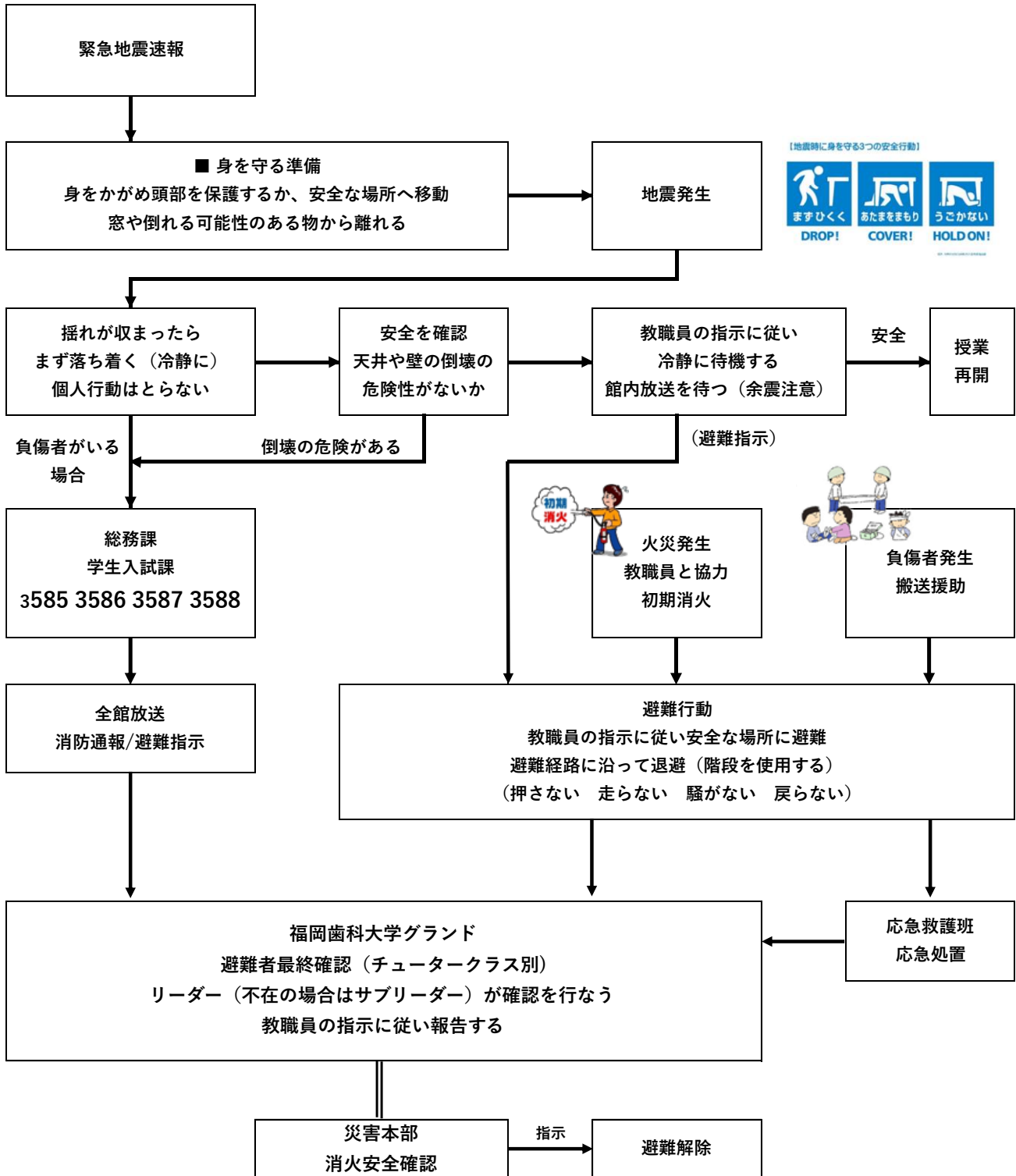
- 1) 火災の場合は自分の身が安全な範囲で周囲の協力を得ながら初期消火。また、消火が困難と判断した場合は、火から離れる。
- 2) 負傷者はいないか？
- 3) 負傷者がいる場合は安全な範囲で周囲の協力を得ながら応急手当をし、事務所等へ連絡。
- 4) 建物の傾き、壁のひびなどを確認。
- 5) 余震の可能性もあるため、あわてずしばらく様子を見る。
- 6) ガラス、ホワイトボード、モニター等が倒れるおそれがなく、天井からの落下物や危険物の流出が無いと確認できた場合は、その場にとどまる方が安全である。

■ 避難指示および避難行動

落ち着いて、安全に避難

押さない 走らない シャベらない もどらない

【大学構内】



地震発生時の行動マニュアル

(教員・事務職員・学生 共通)

突然の地震災害が起こった場合や、緊急地震速報が流れた時に、まずとるべき行動です。「地震発生時の行動マニュアル」と「避難後の行動マニュアル」は、地震に直面した時にあわてて読むのでは遅すぎるため、必ず日頃から確認しておくこと。

地震直前（緊急地震速報）

■ 緊急地震速報がでたら、身を守る準備を！

周りの人に知らせ、身をかがめ
頭部を保護するか、安全な場所へ移動
窓や倒れる可能性のある物から離れる



地震発生

■ 先ずは、自分の身を守る！

ただちに、身をかがめ、頭部を保護するか
丈夫な机などがあればもぐる



揺れがおさまったら

1) 避難口の確保と負傷者や火元の確認！

気を落ち着かせ（声掛け）
ドアや窓を開ける
負傷者がいたら応急処置
火が出たら初期消火

2) 避難指示および避難行動

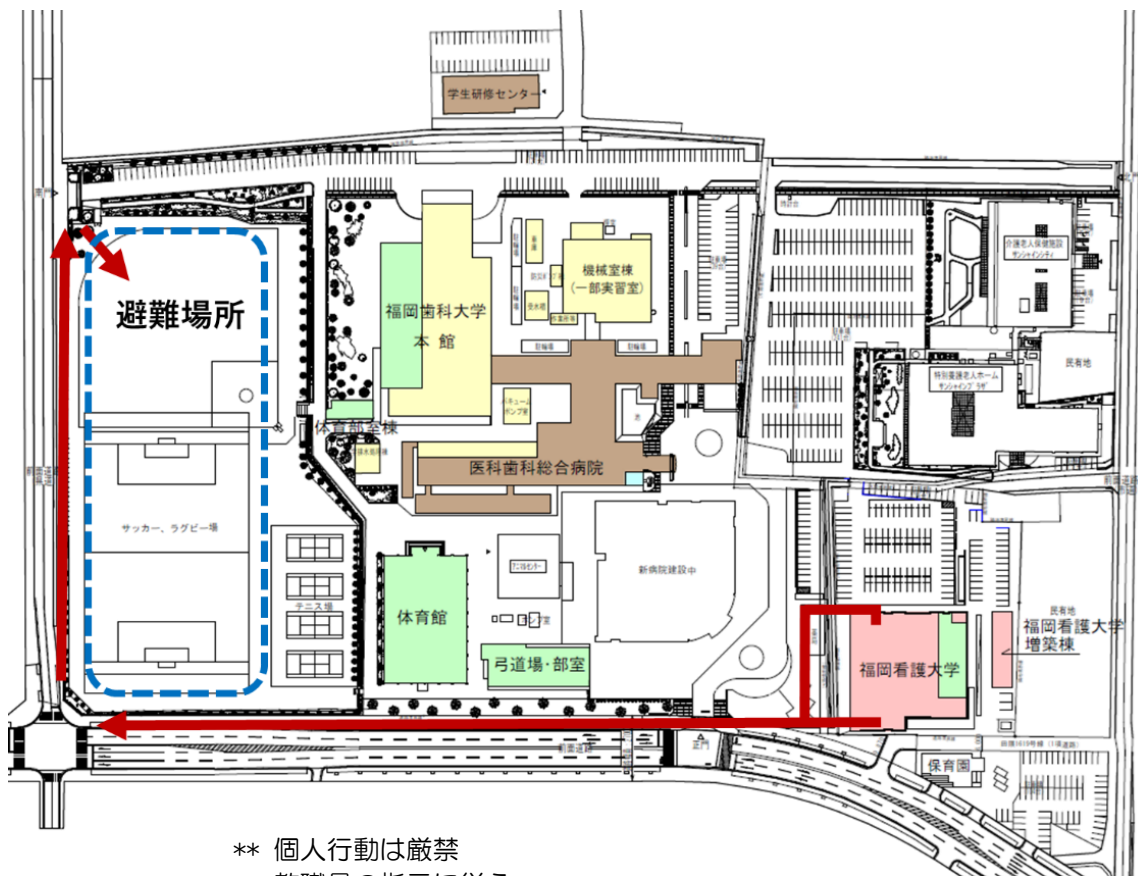
落ち着いて、安全に避難
押さない 走らない しゃべらない もどらない

3) 建物の外へ出る時は、落下物に注意

学生は、必ず教職員の指示に従い行動する

3. 避難

- 1) 教室にいる場合は教職員の指示に従って避難する。あわてて出口に殺到しない。
- 2) 授業中であれば、教員を中心にひとかたまりになって、その他の場合でも声をかけあってできるだけ集団で冷静に避難する。
- 3) 大きな地震には余震がある可能性が高いので、避難経路に添って避難する。災害規模によって、直接に福岡歯科大学グラウンドに避難する場合もあるので、教職員の指示に従う。
○ 福岡歯科大学グラウンド：避難場所
- 4) 落下物や機械類、棚等の転倒、地震による段差や陥没などに十分注意しながら速やかに避難する。
- 5) 避難は徒歩で、持ち物は最小限にとどめること。
- 6) 身障者や負傷者がいる場合は、手助けしながら避難する。
- 7) 重症等により避難できなかった人や行方不明者がいる場合は、教職員にすぐ連絡する。
- 8) 室内では壁伝い、廊下では中央を通る。エレベーターの使用は厳禁。必ず階段を使用する。
- 9) 停電している場合は、緑色の誘導等を目印に避難する。
- 10) 避難場所においては、けが人等に対して医師などの応援が駆けつけるまで、できる限りの応急措置を施す。



** 個人行動は厳禁
** 教職員の指示に従う

情報収集の際には、チェーンメールやうわさなどにまどわされず、大学や公共機関からの正確な情報を入手して行動する。

【大学以外にいる時】

＜実習の病院・施設にいる時＞

- 1) 実習開始前に病院施設のオリエンテーション（非常時）の確認をおこなっておく。
- 2) 災害後、病院施設の災害マニュアルに従った避難行動をとる。
- 3) 管理単位責任者（看護師長）の指示に従い、実習担当教員は学生を誘導し、病院施設指定の避難場所に移動する。

＜通学中＞

- 1) 被害状況を正しく把握する。
- 2) 事前に家族と相談して決めた避難場所に移動する。ただし、被災場所やその場の状況によっては安全を最優先し別の避難場所に移動する。
- 3) 避難中は警察や消防の指示に従う。
- 4) ビル内や地下街にいた場合は、「1.地震発生：地下にいるとき」の避難行動をとる。

＜自宅＞

- 1) 平時より自宅地区の具体的な情報収集手段および緊急避難場所等の確認をおこなっておく。
- 2) 足元の散乱物や落下物に注意して地域の避難計画にそって対応を行う。

4. 安否確認

1) 学内避難時の安否確認

- (1) 学年クラス別（A1～E4）のリーダー（不在の場合、サブリーダー）は、避難後に、教職員にメンバーの安否を報告する。
- (2) 一時避難時、最終避難時、必要に応じ避難誘導の教職員より指示がある。

2) 実習時の安否確認

病院避難マニュアルに従い避難後に、実習リーダーは、実習担当教員にメンバーの安否を報告する。

3) 時間外の安否確認

学生は、直接事務窓口、電話またはメールにて被害状況のご報告をおこなう。

＜連絡先＞

福岡看護大学 事務課
TEL：092-801-0486
Email：knyushi@fdcnet.ac.jp

＜報告事項＞

(1)氏名 (2)学籍番号 (3)本人、家族の状況 (4)自宅や避難場所等の状況 (5)緊急連絡方法など

災害規模により、通信網の寸断等で一般回線が使用できない場合は、「災害伝言ダイヤル」「災害伝言板 web171」を利用する。その場合は、「時間制限 30 秒」「字数制限 100 文字」があるため、「氏名」「本人安否状況」のみおこなう。通信網が復旧した時点で、正確な情報を連絡する。

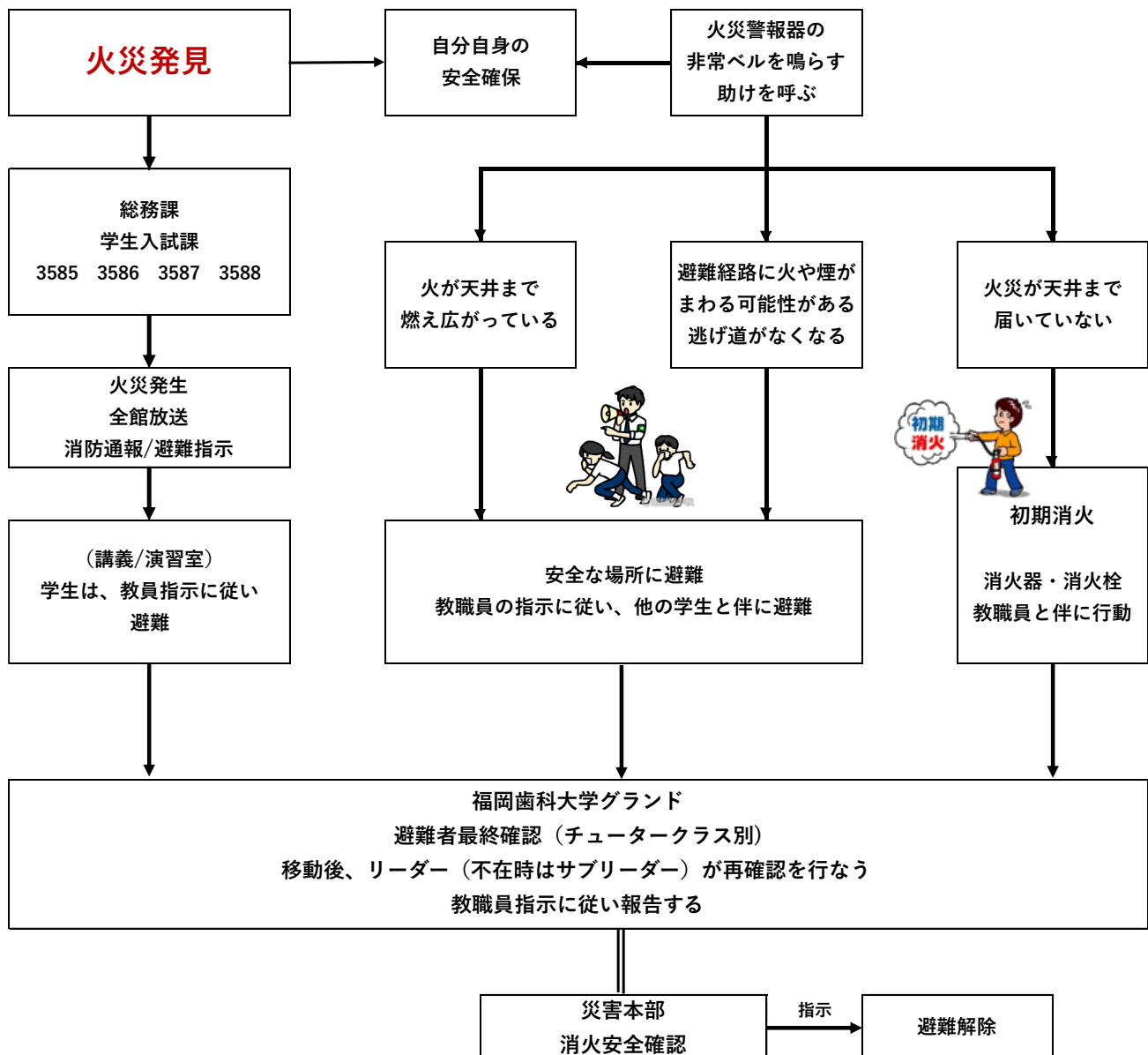
II 火災

「早く知らせる」「早く消す」「早く逃げる」が火災の被害を最小限に食い止めるポイント。日頃から消火器や火災報知機などの配置場所、複数の避難路などを確認しておくこと。自宅においても消火器など最低必要な設備は常備しておくこと。

初期消火は大事。しかし大量のガスが発生したり、火が天井まで広がったら躊躇せず避難すること。

早く知らせる！

- (1) 「火事だ！」と大声で叫んで周囲に早く知らせる。
- (2) 事務室（3585・3586・3587・3588）へ火災の状況を連絡する。
- (3) 非常ベルを押す（報知器のベルが鳴り、消火栓ポンプが始動し、発火場所が防災に伝わる）。
- (4) 初期消火をおこなう



火災発生時(～3分)

消火は最初の3分間が最も大切といわれます。
ただし、一般の人が消火できるのは天井に火が回る前まで、それ以上燃え上がったら危険です。



1 大声で知らせる 火災報知器を鳴らす

○出火した場合は、大声で「火事だー」と叫び、近くにいる人に連絡通報する。



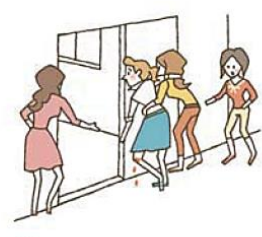
2 初期消火

○消せると判断したら近くにいる人と協力して初期消火に努める。危険と感じたら無理なことはしない。
○天井にまで火が燃え移ったら、すぐに避難する。



3 素早く行動

○一度避難したらカバン・貴重品などを忘れても絶対に部屋へ取りに戻らない。
○煙が発生したらハンカチ等を口と鼻にあて姿勢を低くして避難する。
○服装や持ち物にこだわらずとにかく早く避難する。

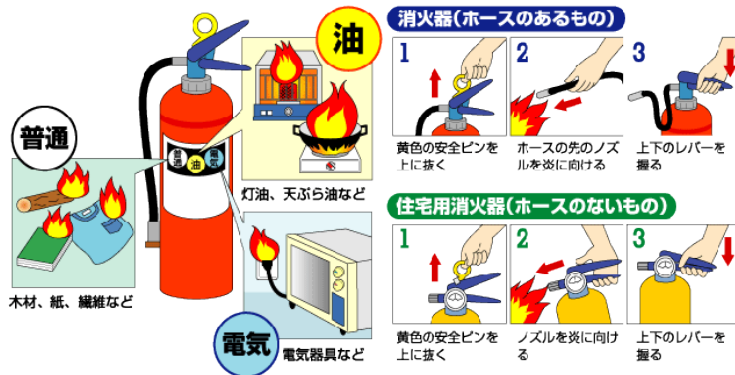


4 優先

○高齢者・子ども・病人・けが人・体の不自由な人を優先する。

火災報知器が鳴ったら その建物および隣接する建物にいる人、または目視で危険と判断される場合は、教職員の指示のもと避難をしましょう。

消火器の使い方



避難後は

あわてず周囲の状況を冷静に判断し、気を落ち着かせてください。



1 確認

○周りの友人の無事を確認する。



2 知らせる

○逃げ遅れた人・行方不明な人がいたら、近くの教職員又は消防隊員にすぐに知らせる。

出典：もしもの時にあなたを守る災害対応マニュアル



3 指示に従う

○避難場所では教職員の指示に従い勝手な行動はとらない。
○デマには惑わされないよう注意する。

Ⅲ. 風水害

台風は規模や襲来時間などを事前に予測することができる。正確な情報をはやく知って台風通過に備え、通過中は外出しないこと。また、集中豪雨等により避難勧告が出されることもあるので、テレビ等からの情報収集は怠らないこと。

地震と同様、普段から非常用持ち出し品の準備をしておくこと。台風接近時には外出を控え、飛びやすいものは屋外に置かず戸締りを厳重に。

梅雨の終わり頃によく起こる集中豪雨は、狭い地域に突発的・集中的に雨が降るため、予想が極めて困難です。中小河川の氾濫や土砂崩れ、崖崩れなどによる被害が予想されるため、崖付近や造成地などでは気象情報に細心の注意を払うことが必要です。一定の基準雨量を超えると避難勧告が発令され、テレビやラジオなどの報道機関から情報が流されます。気象台などから出される情報に常に注意し、すみやかに避難してください。この場合も、事前の準備と冷静な行動が被害を最小限に食い止めます。

【雨の強さと降り方】

出典:もしもの時にあなたを守る災害対応マニュアル

一時間雨量 (mm)	10以上～20未満	20以上～30未満	30以上～50未満	50以上～80未満	80以上
予報用語	やや強い雨	強い雨	激しい雨	非常に激しい雨	猛烈な雨
人の受けるイメージ	ザーザーと降る	どしゃ降り	バケツをひっくり返したように降る	滝のように降る	息苦しい圧迫感がある恐怖を感じる
人への影響	地面の跳ね返りで足元がぬれる	傘をさしてもぬれる		傘は全く役に立たない	
屋外の様子	地面一面に水たまりができる		道路が川のようになる	水しぶきであたり一面が白っぽくなったり視界が悪くなる	
車に乗っていて		ワイパーを速くしても見づらい	高速走行中、ハイドロプレーニング現象が生じる	車の運転は危険	
災害の発生状況	この程度の雨でも長続くと時は注意が必要	側溝や下水、小さな川があふれ小規模の崖崩れが始まる	山崩れ・崖崩れがおきやすくなり危険地帯では避難の準備が必要 都市では下水管から雨水があふれる	都市部では地下室や地下街に雨水が流れこむ場合がある マンホールから水が噴出する 土石流が起こりやすい 多くの災害が発生する	雨による大規模な災害の発生する恐れが強く、厳重な警戒が必要

【風の強さと吹き方】

平均風速 (m/秒)	10以上～15未満	15以上～20未満	20以上～25未満	25以上～30未満	30以上～35未満	35以上40未満	40以上
予報用語	やや強い風	強い風	非常に強い風		猛烈な風		
おおよその時速	～50km	～70km	～90km	～110km	～125km	～140km	140km～
速さの目安	一般道路の自動車		高速道路の自動車		特急電車		
人への影響	風に向かって歩きにくくなる 傘がさせない	風に向かって歩けない 転倒する人もでる 高所での作業はきわめて危険	何かにつかまっていなくて立ってられない 飛来物によって負傷するおそれがある		屋外での行動は極めて危険		
屋外・樹木の様子	樹木全体が揺れ始める 電線が揺れ始める	電線が鳴り始める 看板やタン板が外れ始める	細い木の幹が折れたり、根の張っていない木が倒れ始める 看板が落下・飛散する 道路標識が傾く		多くの樹木が倒れる 電柱や街灯で倒れるものがある ブロック壁で倒壊するものがある		
走行中の車	道路の吹流しの角度が水平になり、高速運転中では横風に流される感覚を受ける	高速運転中では、横風に流される感覚が大きくなる	通常で速度で運転するのが困難になる		走行中のトラックが横転する		
建造物	樋(とい)が揺れ始める	屋根瓦・屋根葺材がはがれるものがある 雨戸やシャッターが揺れる	屋根瓦・屋根葺材が飛散するものがある 固定されていないプレハブ小屋が移動、転倒する ビニールハウスのフィルム(被覆材)が広範囲に破れる	固定の不十分な金属屋根の葺材がめくられる 養生の不十分な仮設足場が崩落する	外装材が広範囲にわたって飛散し、下地材が露出するものがある	住家が倒壊するものがある 鉄骨構造物で変形するものがある	

地震など大災害発生時に、安否確認などの電話が優先的に増加し、つながりにくい状況になった場合に提供されるサービスです。

電話で確認

NTT災害用伝言ダイヤル

伝言の発信 伝言の再生

① **1711**へ電話をかける
カードが流れる

② **1** **2**

③ **市外局番+** **被災地の方の電話番号**
自宅の電話番号

- 利用可能な端末/NTTの一点電話、公衆電話、携帯電話
- 着信伝言数/1伝言 30秒以内
- 発信時間/1伝言 30秒以内
- 伝言保存期間/2日間(8時間※自動消去)

インターネットで確認

NTT災害用伝言板(Web171)

① <https://www.web171.jp/>
ホームページ

② 登録または確認したい電話番号を入力
※数字のみ・1はしで入力

③ 伝言を送信する

④ 登録の場合はひらがな氏名(「安否」(伝言)を入力して伝言を送信する)を入力

⑤ 1伝言・100文字以下・最大20件登録可

携帯各社の災害伝言サービス

- NTTドコモ** <http://dengon.docomo.ne.jp/top.cgi>
- KDDI(au)** <http://dengon.ezweb.ne.jp/>
- ソフトバンク** <http://dengon.softbank.ne.jp/>
- ワイモバイル** <http://dengon.willcom-inc.com/>
- イーモバイル** <http://dengon.emnet.ne.jp/>

危険物から離れる！
落下物から頭を守り、安全な場所にしゃがむ！

地震発生直後(～2分)



CHECK1

身を守る

●窓や棚、ガラスなど割れたりのものから離れる。
●机の下などにもぐるか、バッグ・衣類などで頭を覆うなどして、落下物から頭と手足を守る。



CHECK1 火の始末

●実験中など火気を使っているときは身の安全を確認した上で火を消す。また、薬品などから離れる。

CHECK1 出口確保

●ドア付近にいる人は、ドアを開け、出口を確保する。

余震に注意して行動！
停電時は誘導灯を目印に避難！

揺れがおさまったら(3～5分)



CHECK1

自分自身の心構え

●冷静に、落ち着く。
●建物の傾き、壁のひびなどを確認。
●火災が起きていないか？火災の場合は自分の身が安全な範囲で周囲の協力を得ながら初期消火。また、消火が困難と判断した場合は火から離れる。
●負傷者はいないか？負傷者がいる場合は安全な範囲で周囲の協力を得ながら応急手当をし、事務局へ連絡する。
●余震の可能性もあるため、あわてずしばらく様子を見る。

CHECK1 避難場所へ移動する判断基準

●ガラス、黒板、テレビなどが倒れる恐れがなく、天井からの落下物や薬品の流出が無いと確認できた場合は、動かないほうが安全である。

CHECK1 行動に移るとき注意点

●火災の場合は煙を取わないよう、タオルなどで口を覆う。
●どのルートで移動すれば安全か確認し、エレベーターは使わずに階段で移動。
●落ち着いて行動し、負傷者を優先する。

正確な情報収集！ 情報や周囲の状況を冷静に判断！
周囲の人と協力し合いながら、身の安全を守る。

落ち着いたら



CHECK1

行動に移るとき注意点

●余震が落ち着き、帰宅手段等の安全が確認されるまで無理に帰宅せず、大学にとどまり大学の指示に従って行動する。
●情報収集の際は、チェーンメールやワサなどにまどわされず、大学や公共機関、テレビ、ラジオなどからの正確な情報を入力して行動する。

CHECK1 帰宅可能な場合

●帰宅可能な場合は、必ず大学に報告してから帰宅する。
●帰宅時は、できる限り同じ方向の2人以上で行動する。
●帰宅後、速やかに大学へ安否連絡する。

CHECK1 学内にとどまる場合

●交通機関が停止する、帰宅が深夜になるなど、帰宅困難となった場合は、学内にとどまる。
●建物内への移動、宿泊場所などについては教職員等の指示に従う。
●家族への安否連絡は、裏面の伝言ダイヤルサービス、伝言板サービスを利用して自分自身で行う。



参考 通学途中などに徒歩で帰宅する目安の距離は20km以内とされています。あらかじめ、自宅と大学間の距離や帰宅経路を確認しておきましょう。また、災害時の歩行速度は、時速2.5km程度といわれています。10kmを歩いて帰る場合、4時間はかかることを考えましょう。

CHECK1

●事前に家族と相談して決めた避難所へ移動する。ただし、被災場所やその場の状況によっては安全を最優先し別の避難場所へ移動する。

CHECK1

●家族への安否連絡、大学への安否連絡をする。
●周囲と協力しながら身の安全を守る。

大学にいるとき

通学中

CHECK1

●周辺の状況に注意し、身の安全の確保を最優先とする。
●鼎、電柱、自動販売機などから離れ、落下物にも注意する。

CHECK1

●被害状況を正しく把握する。
●避難中は警察や消防の指示に従う。

CHECK1

●事前に家族と相談して決めた避難所へ移動する。ただし、被災場所やその場の状況によっては安全を最優先し別の避難場所へ移動する。

CHECK1

●家族への安否連絡、大学への安否連絡をする。
●周囲と協力しながら身の安全を守る。

V. 弾道ミサイル落下時の行動について

内閣官房国民保護ポータルサイト

1. Jアラートについて

弾道ミサイルが日本に飛来する可能性がある場合には、政府としては、24時間いつでも全国瞬時警報システム（Jアラート）を使用し、緊急情報を伝達します。

Jアラートを使用すると、市町村の防災行政無線等が自動的に起動し、屋外スピーカー等から警報が流れるほか、携帯電話にエリアメール・緊急速報メールが配信されます。なお、Jアラートによる情報伝達は、国民保護に係る警報のサイレン音を使用し、弾道ミサイルに注意が必要な地域の方に、幅広く行います。

1. Jアラートによる情報伝達

** 弾道ミサイルが発射された旨の情報を伝達し、避難を呼びかけます。

1) 弾道ミサイルが日本に飛来する可能性があるとして判断した場合

- (1) 屋外にいる場合は、近くの建物（コンクリート造り等頑丈な建物）の中、または、地下（地下街や地下駅などの地下施設）に避難して下さい。
- (2) 屋内にいる場合には、すぐに避難できるところに頑丈な建物や地下があれば直ちにそちらに避難して下さい。
- (3) できるだけ窓から離れ、できれば窓のない部屋へ移動して下さい。

2) 弾道ミサイルが日本の領土・領海に落下する可能性があるとして判断した場合

** 続報として直ちに避難することを呼びかけます。

- (1) 屋外にいる場合には、直ちに近くの建物の中、又は地下に避難してください。
- (2) 近くに適当な建物等がない場合は、物陰に身を隠すか地面に伏せ頭部を守って下さい。
- (3) 屋内にいる場合には、できるだけ窓から離れ、できれば窓のない部屋へ移動して下さい。

3) 弾道ミサイルが日本の領土・領海に落下したと推定された場合

** 落下場所等についてお知らせします。

- (1) 続報を伝達しますので、引き続き屋内に避難してして下さい。

4) 弾道ミサイルが日本の上空を通過した場合

** 他に追尾しているミサイルやミサイルから分離した落下物が我が国の領土・領海に落下する可能性が無いことを確認した後、弾道ミサイルが通過した旨の情報をお知らせします。

- (1) 屋内に避難する必要はありません。
- (2) 不審な物を発見した場合には、決して近寄らず、直ちに警察や消防などに連絡して下さい。

5) 日本まで飛来せず、領海外の海域に落下した場合

** その旨を続報としてお知らせします。

- (1) 屋内に避難する必要はありません。
- (2) 審な物を発見した場合には、決して近寄らず、直ちに警察や消防などに連絡して下さい。

- ※ 落ち着いて、教職員の指示にしたがって下さい。
- ※ 外にいる場合は、近くの校舎に入って下さい。
- ※ ブラインドを下ろし、窓から離れて下さい。

Check Point



屋外にいる場合

- 近くに地下鉄や地下街、地下室があれば、逃げ込む。
- 地下に逃げ込めない場合は、頑丈な建物の中に入る。
- ガラス窓が視野に入らない場所に移動する。
- 車に乗っている場合はエンジンを切って降り、地下や頑丈な建物の中に避難する。

屋内にいる場合

最優先事項

- その建物に地下室があれば、逃げ込む。
- (地下へ行けない場合) 窓がないトイレ、風呂場、倉庫、押入れ、廊下などに逃げ込む。
- 窓のそばにいる場合は、ブラインドやカーテンを閉め、熱線を遮断する。
- 窓ガラスから離れ、机の下に潜る、椅子を楯にするなど、窓との間に遮蔽物を置き、飛び散るガラス片を避ける。
- 窓がない場所に移動できたら、地面に伏せて目と頭を覆う。
- 特に目を守るために、閃光を絶対に見ないようにする。

時間があれば

- 近くにテレビ・ラジオがあれば電源を入れ、音量を上げる。
- 火気の使用はただちに止める。
- 熱線(閃光)による火傷を防ぐため、できるだけ肌を覆う。